

岡崎市美術博物館ニュース〈アルカディア〉

96
AUTUMN
2023

ARCADIA

OKAZAKI CITY MUSEUM NEWS



至高の紫 典雅の紅 王朝の色に挑む

会期 令和5年9月16日(土)~11月5日(日)

酒井 明日香

大河ドラマ「どうする家康」の影響で、今年は岡崎のまちのいたるところで紫色をよく目にします。主役の殿のメンバーカラーが紫ということで、お土産や関連グッズも紫色が人気ようです。そして盛り上がりをもよおす「家康」の次は「光る君」へ、偶然にも「紫」を展覧会名に冠したのが本展です。(実は展覧会開催の速報を知りました。なんて偶然)大河ドラマ決定の速報を知りました。なんて偶然)しかもただの紫ではありません。「至高の紫」です。高級感・華やか・ミステリアス、などが現在の紫色のイメージですが、実際、古代には東洋でも西洋でも、紫色は貴重で高貴な色として尊ばれていました。

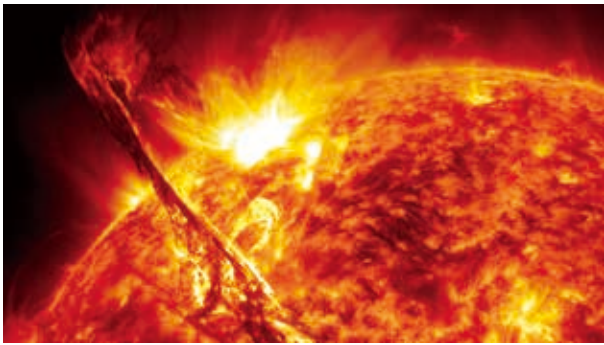


《紅梅の桂と桜の細長》(『源氏物語』「若菜上」女三の宮) 2008年 染司よしおか蔵

本展では、現在では失われてしまった色彩を追い求め、自然素材の染料を用いて日本の伝統色の再現に情熱を注いだ、吉岡常雄・幸雄親子の挑戦を紹介します。京都にある江戸時代から続く染色工房である「染司よしおか」の四代目当主であり染色家の吉岡常雄と、五代目当主で染色家・染織史家の吉岡幸雄は、世界中を旅して古今東西の染織品を学び、古代のまばゆい色彩を現代に蘇らせました。

彼らの仕事の中でも、本展では主に次の二つをご紹介します。まずひとつは、寺社の行事を彩る染織品です。一九八〇〜九〇年代には、法隆寺・東大寺・薬師寺といった古代の大寺院で、様々な記念行事が営まれました。こうした行事を彩る品々を、吉岡常雄・幸雄両氏は古式にのっとり制作し、奉納しました。そしてもうひとつが、吉岡幸雄が特に注力した、『源氏物語』をはじめとする王朝文学に登場する色彩の再現です。平安時代になると、中国から伝わった色彩は日本の風土の中で育まれ、色の取り合わせで自然や四季の移ろいを表現する「かさね色」が生まれました。吉岡幸雄は一〇年以上の歳月をかけて、王朝人が洗練させた豊かな色彩の研究成果を、『源氏物語』に記される色彩の再現として結実させました。

こうやって書くと「難しそう」と思われるかもしれませんが、着物や染織品がお好きな方はもちろん、古典文学ファンの方や、ファッションやおしゃれに関心のある方、和風の世界観を売りに創作しているイラストレーターや漫画家の方、配色アイデアを増やしたいデザイナーの方など、日本の伝統色にちよつとでも興味がある方に、ぜひ色彩の美しさを堪能していただきたい展覧会です。印刷物や写真では伝えきれない美しさを、展示室でお楽しみください。



太陽観測衛星 SDO がとらえたプロミネンス
NASA's Goddard Space Flight Center/SDO

でも、2 m とか 3 m とかの大画面と向き合うということは、パソコンやスマホではできない体験です。また、この写真展、当館との相性がとても良いと思うのです。

当館は壁や床が暗い色なので、「展示室が暗い」とご迷惑をおかけすることも多いのが実情です。しかしこの展覧会の舞台は宇宙です。当館が得意とする、暗い中に照明で作品を照らし浮かび上がらせる展示は、宇宙空間を切り取った写真たちをきつと映えさせてくれるはずです。さらに昨年から改修工事で、空間を照らすダウンライトを、全て調色可能な LED に更新しました。これまでは白熱灯の赤味を帯びた光でしたが、LED にしたこと、蛍光灯のような白い光で作品を照らすことができます。

暗闇に妖しく光る土星のリング、太陽から噴き出す巨大なプロミネンス、色とりどりの銀河や星雲。白い壁にかけて作品として鑑賞するのによいですが、宇宙空間に浮かび、投げ出されたような没入感を味わえるのは、当館ならではの一言でよいでしょう。



逆光に浮かぶ土星 NASA/JPL-Caltech/SSI

いきなりの私事で恐縮ですが、以前、ネコとどうぶつたちの写真展を担当したことがあります。普段、日本の歴史の展示ばかりなので、とても楽しく、学芸員という仕事の幅広さを実感した覚えがあります。その時は、「さすがにこれ以上、自分の専門から離れた展示はないだろうなあ」と思っていました。が、甘かった。まさか地球を飛び出そうとは…

さて本展は、NASA の惑星探査機や観測衛星、宇宙望遠鏡などがとらえた画像の膨大なアーカイブから、選りすぐって紹介する写真展です。実は、これらの画像のほとんどは公開されており、NASA のホームページで誰でも見ることが出来ます。



M16 (わし星雲)「創造の柱」NASA, ESA, and the Hubble Heritage Team

サイエンスでありながらアートのごとく、見る人々を魅了する画像の数々が並ぶ展覧会です。アートを鑑賞するように写真を眺め、解説を読んで、人智を超える存在に挑戦する研究者たちの成果を知る。「マインドスケープ」を標榜し、美術博物館という形態をとる当館とも親和性の高い展覧会となっています。

なお、本展は写真撮影可能です。国立天文台のすばる望遠鏡や、ハッブル宇宙望遠鏡になった気分、撮影してみるのも楽しいかもしれません（カメラを構えたままの回遊はご遠慮ください）。

今回で自分の専門から 138 億光年離れた。これ以上挑戦するしかない。なので、さすがにもうないだろうなと思いません。…ないよね？

皆さまも、本展で日常からの離脱を体験してみませんか？

写真展

138 億光年 宇宙の旅

驚異の美しさで迫る宇宙観測のフロンティア

湯谷 翔悟

現代の超現実を探してⅡ

〈描く行為は何を描くかという選択に先立つ〉

3

今泉 岳大



三科琢美 上《地中のことば》2023 下《歪んだ主語》2023

三科琢美は紙にペンと鉛筆で線やかたちを描いている。三科が描くものは抽象的で有機的なかたちである。それは注意深く見れば人体や人の顔のように見える部分があるものの、追ってゆくと、何か特定のかたちに変態することを否定するように別のかたちへと姿を変えて実体を失う。かたちは次々と連続し、増殖して広がってゆく。全体として見るとそれは、かたちになりかけた人体や顔が禍々しく蠢いている地獄絵図に見えるし、未開部族で使用される呪術的な文様のレリーフのようにも見える。またごつごつした岩しかない荒涼とした土地の地図のようにも、全体としてひとつの生き物のようにも見えるかもしれない。《地中のことば》(図下段)は全体で高さ二m一〇cm、横八m五〇cmにもなる大きさで見る者に迫る。蠢くオブジェクトは見る者の視線を奪い、変容するかたちが視点を誘導しながら、私たちの野性的な領域、あるいは心の内に幽閉している混沌や狂気と無許可に交信をはじめようである。

三科は子供時代から絵を描くことに親しみ、金沢

美術工芸大学で絵画を学び、大学を出てからは中学校の美術教員の傍らで制作を続けている。三科が紙とペンによる本作のシリーズに取り掛かったのは二〇一〇年頃、博士課程のときであった。制作の中で三科は絵画の制作の前提にある四角いキャンバスという装置、絵具や絵筆という素材と向き合うことが徐々に辛くなったという。真っ白なキャンバスはその前で立ちすくむ三科を威圧し、油絵具と絵筆は「絵画」の制作を容赦なく強要した。そうして、三科は彼が美術大学に入る以前から生活の中で続けていたという紙とペンによる制作に立ち返り、これを徹底的に追及することにした。

本シリーズのベースになっているのは、紙を繋ぎ合わせた巨大なスクエアの支持体に一塊のオブジェクトを緻密に描いたものである。そして、平面と並行してオブジェクトをそのまま物質化したイメージの立体を制作するが、これには《溶解するドロイジン》というタイトルが付けられており、描くことのバリエーションとして意識されている。立体を経て展開した《線の生命体》(図上段)はオブジェクトをスクエアの背景から抜き取り、図だけを抽出した作品となっている。支持体がスクエアを保っていた(図下段)では、決められた地の上に存在する図として世界が限定されていたのに対し、(図上段)では地という概念を排除することで、図が設置される場そのものを地とすることができ、三科が描くオブジェクトは四角い画面という絵画的な制約からまたひとつ解放された。(図上段)へ変化した作品は到達すべき絵画的な正解をすり抜けると同時に、より自由な可変性を獲得したことで、完成という絵画としての制作の終わりを見失うことでもある。

三科の制作における「絵画的な絵画の否定」「描く行為への原点回帰」「完成の忌避」は美術という枠組みからの逸脱である。三科が身をよじって抜け出そうとしたのは形式としての絵画であると同時に制度として

の美術である。三科が描く行為を美術から還元させるために必要としたのは、入手が容易な素材であり、手を動かさずすぐに始められる手軽さであった。三科は仕事が忙しい時期でも一日に一度、少ない時間でも紙とペンで描くという行為を絶やさないように努めた。それは何か描きたい具体的なものがあるからではなく、ただ描くこと、ペンを持って手を動かすという身体的な行為の中で様々なことを考えたり思ったりする時間であるのだという。

サルトルは「実存は本質に先立つ」として、人間は本質を持たないまま否応なく存在(実存)してしまふのであり、本質とは生きることを重ねることで創り上げられるとした。この実存主義の思想は三科の制作と重なる。「描く行為は何を描くかという選択に先立つ」、つまり描く行為そのものがまず重要で、何を描くのか、また描かれたものが何であるのかは事後的に見出されてゆく、と。そのように考えると、三科の制作は理性を超えて無意識を表出させるシュルレアリスムの制作手法であるオートマティスムに似ているように思える。しかし、オートマティスムがあくまでも無意識の表出に受動的であったのに対し、三科は描く行為の中で思考を意識的に深化させる。これをセミオートマティズムとでも言うおうか。

「描く行為への原点回帰」は描くことの純粹性の回復である。ピュアだから描くという制作態度を美術は冷遇してきた。それは美術史がそのうねりの中で複雑さを重ねたが故の病でもある。三科の制作が向かうのは、制度としての美術や形式としての絵画では到達することができない何かを浮き彫りにして、美術を含めた、広く「人が創造するもの」の意味や価値を組み替えることにあるはずだ。

連載

本多家の家臣団 3 〈本多忠勝の家臣団 ③〉

湯谷 翔悟

〈承前〉さて、ここまで家康から附属された家臣という表現をしてきたが、近世後期の家譜や記録を見ると、彼らのことを「御附人（御付人）」と呼称している。『日本国語大辞典』を引くと、「付人」で次のように立項されている（一部抜粋して引用）。

① 側近としてつけておく人。
② 江戸時代、幕府から親藩に、また大名の本家から分家に監督などのために付けておいた家老職。また、その職にある人。付け家老。

また、家康家臣団に言及する近年の出版物でも「付人」と紹介される例もある。しかし御附人の呼称は、近世中期に議論されている形跡があることから、単に付人ではなく「御」を付けて記すべき歴史用語である。「榊原系譜及家中姓名」（西尾市岩瀬文庫蔵）の中に、次のようにある。

対馬守様方御尋二御座候て、公儀之二字除キ候而御附人と計認可然被思召候、若又御用人内証二而相尋候埒二候者、公儀之二字御座候而者苦ケ間敷候、菟角平等二御内談候而宜ク取計候様二御答御座候

これは享保一四年（一七二九）、榊原家と幕府老中安藤信友との間で行われたやりとりの写の部分である。これを見ると、榊原家が「公儀御附人」としていたが、幕府からの指摘をふまえて、御附人と称することが決まったことがわかる。家康が附属した家臣に関するものであり、公儀が家康を指すことは間違いなく、御附人の「御」は家康へ

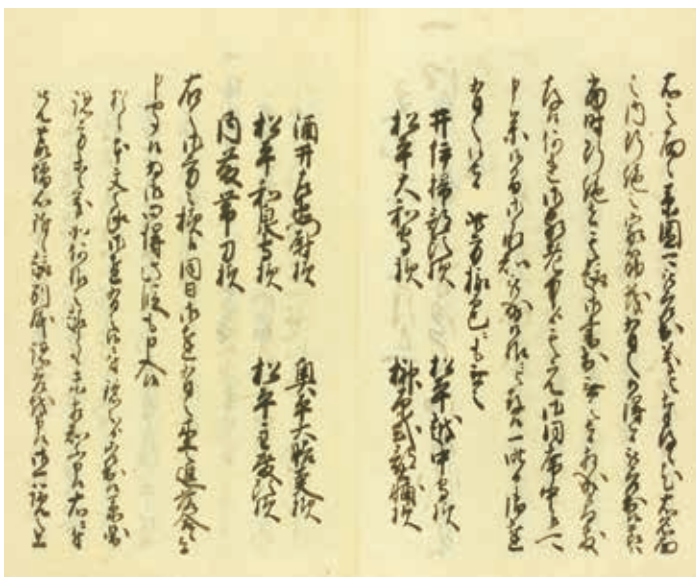
の経緯を示すものである。そしてこの時点で御附人という呼称・集団がいわば幕府公認のものとなり、各大名家でも使用され定着していったのであろう。

御附人が、本多・榊原家だけでなく、複数の大名家に存在していたことが、「元御家人筋目之面々系図御改二付、取調方一件」（個人蔵）という史料からうかがえる。これは文化元年（一八〇四）になされた、御附人に関するやりとりをまとめたもので、『寛政譜』編さんに関わるものである。これを見ると、各家の御附人の実態確認と家譜の提出が命じられたことがわかる。列記されるは本多家のほか井伊・松平越中守（久松松平系）・松平大和守（家康次男秀康系）・榊原・酒井（忠次系）・奥平・松平和泉守（大給松平系）・内藤の八家で、徳川譜代の家が連なっている。以上から御附人とは、近世中期に成立した歴史用語で、家康譜代の家臣に附属された人物を指すといえる。御附人は家康が附属した家臣である。御附人を検討することは、単に本多家家臣団だけではなく、家康の家臣団編成を考えていく上で非常に重要である。

しかし御附人という集団は、近世中期に定義づけられたものであり、御附人一人ひとりの実態をかえつて不鮮明にしていることは注意が必要である。既に小宮山敏和氏が、榊原家を事例に明らかにしているところであるが、一言で御附人といっても、近世の家臣団の中で、高禄で家老級の家に繋がる家系がある一方で、中級程度の知行高に留まる御附人の系譜の家も存在する。御三家の付家老のような、明確な

まとまりが存在しないのである。まとまりはないが、それでもいくつかグループ分け程度まであれば不可能ではなさそうである。少ない、しかも近世の家譜・分限帳・記録類などの史料に頼らざるを得ないが、次の稿で検討してみよう。

〈続〉



元御家人筋目之面々系図御改二付、取調方一件（個人蔵）

江戸時代の 事件簿

山下 葵

CASE 2



5

二度目の盗み

(承前)

天明八年(一七八八)、ちのという少女は十二歳で盗みをした。そのときは答刑・贖刑(罰金刑)は免じられ、御刑法場叱という嚴重注意処分になった。しかし、ちのは寛政三年(一七九一)、十五歳で再犯に及ぶ。

多数現存する熊本藩の判例集の中には、犯罪の内容ごとに整理されたものがある。そのうち『盗賊』は、盗みに関する重要な判例をまとめたものである。その中に、寛政三年のちの再犯の判例が収録されている¹。

(前略)

寛政三年十一月

右者、^①盗いたし候付、とらハ答刑、ちのハ叱り被仰付候処、猶又盗いたし候、此とら、^②贓数三貫文以下四十答当前候得共、再犯二付、前罪七十答四等を加、刺墨答六十徒一年之刑可被處処、^③女之刺墨徒刑ハ被除候定例二付、百答之刑可被處哉、
此ちの四十答当前候へ共、^④再犯二付前罪七十答二、四等を加、刺墨答六十徒一年之処、^⑤当年十五歳相成候付、定例之通贖刑可被仰付候得共、乞食之儀二付、其達難相成、^⑥とら同様百答之刑被處候而者、十五才以下御宥議之御極を被立置候詮も相見不申事二付、再犯之当罪六十答徒一年与いふ二よつて、全徒刑を除キ、六十答限之御刑法可被仰付哉、
(後略)

婦女犯事

この寛政三年の判例には「ちの」と「とら」について書かれている。とらという女性もまた物貰い身分である。彼女は、天明八年のちのの初犯の際にも共に盗みを働いており、当時とらは十五歳以上であったため七十答の実刑となっていた。この度二人はまたしても盗みを行ったという(傍線^①)。今回は、盗んだ金額は三貫文以下で四十答相当となる(傍線^②)。

彼女たちは再犯であるため、再犯の規定を参照せねばならない。刑法草書には「再犯」という条があり、次のような規定がある²。

再犯
一^④答七十以上之再犯ハ、初犯之刑に四等を加て刺墨に至る、若再犯之罪初犯之罪より重キハ、再犯之当罪に四等を加
(後略)

ちのとらの初犯は七十答相当で、再犯が四十答相当である。再犯条によれば、初犯七十答以上の量刑であった者が再犯した場合は初犯の量刑に四等を加えて、刺墨を付加する(傍線^④)。従って、ちのとらの量刑は「刺墨答六十徒一年」となった(傍線^④)。

『口書』によれば、このときとらは十九歳、ちのは十五歳であった³。とらは年少者としての扱いはうけていない。しかし、女性であることを理由に刺墨と徒刑は除かれ、答刑の上限である百答とすることで決着している(傍線^③)。これは、女性に対しても刑罰適用上の特則があったためである³。

一 婦女ハ唯姦犯・殺傷・盜賊・且死罪を犯候者迄を刑に處ス、

但、扶持人類、直二刑を不加者之妻・

家類之女ハ、其見合を以論定、

一^⑤女ハ都て刺墨・徒刑・追放を除、

一 懷孕之女ハ拷問・刑法俱に産後百日ハ免之、

これによれば、熊本藩では女性には刺墨・徒刑・追放を科さないと規定されている(傍線^⑤)。そのため、とらに対しては、答刑の最大値である百答を科すことになった。

ちのはとらと同じ「刺墨答六十徒一年」の量刑であったが、最終的には六十答となっている。これは老人幼年者犯事条、婦女犯事条及び再犯条を参照しながらも、ちのの個人的な状況を考慮して決定された判決である。

まず、ちのは十五歳で年少者への刑罰の減免が対象になる。初犯同様、贖刑に換えるべきということになるが、前回の解説のとおりちのは物貰い身分であり支払い能力がない(傍線^⑤)。

加えて、婦女犯事条規定により、女性であるちのには刺墨と徒刑は科さない。女性が徒刑以上となった場合は、とら同様に答刑の最大値である百答とするのが通例である。しかしながら、十九歳のとらと同様に十五歳のちのに百答にしてしまうと、年少者への刑罰を減免するという規定が成り立たなくなる(傍線^⑥)。とはいえ、御刑法場叱という初犯と同じ刑罰にしては、再犯した者への懲戒が不十分であり、初犯よりは重い刑罰を科す必要があった。

以上のような状況すべてを考慮して、ちのに対しては、「刺墨答六十徒一年」から刺墨と徒刑を除いた六十答のみを科すということが本件の状況では最も合理的であると判断されたのである。(続)

¹ 『盗賊寛政三年』文化元年

² 『熊本大学附属図書館寄託永青文庫資料』所収、資料請求番号 一三・二二・三二五

³ 小林宏・高塩博編『熊本藩法制史料集』創文社、一九九六年、一三六四〜一三六七頁

⁴ 『口書寛政三年』熊本大学附属図書館寄託永青文庫資料』所収、資料請求番号 一三・一五四
この史料にはちのやとらの取り調べの記録や判決に至るまでの経緯が最も細かく記されている。

⁴ 小林宏・高塩博編『熊本藩法制史料集』前掲書、二六〇頁

博物館実習 実施報告

金沢 実徳



八月九日（水）から十三日（日）までの五日間、当館では博物館実習が行われました。
今年の実習には、愛知県内の四大学から四名の実習生が参加しました。

「博物館実習」とは、大学における学芸員教育の最終段階における科目で、学芸員を目指す学生が博物館の現場を実際に経験し博物館業務の実務の一端を担うことにより、学芸員としての社会意識を身に付けること、館で働く心構えを育むこと等を目的としています。

当館は美術博物館のため、主に美術や歴史学を専攻している学生が実習に参加する傾向にありますが、今年に関しては総合政策学部や情報学部と異色の学部とも思える学生も実習に参加しました。

実習内容も多岐にわたり、美術及び博物館の資料の取り扱いをはじめ、展覧会の企画、教育普及活動、広報や博物館の組織についての運営面に関しても実習を行いました。

特に、ワークショップの準備から実施まで一週りを運営するワークショップ演習は当館初の試みでした。実習期間に実施していた展覧会「どうする家康」関連イベントである、「花押ワークショップ」を、ワークショップの講師を務める学芸員と資料の準備や運営方法を練り上げ、実施しました。演習では、講師がワークショップの経験が浅い「学芸員レベル1」であると仮定して、所要時間二時間という限られた時間の中でいかにスムーズに進行するかを考えるものでした。実習生は、事前に用意していたプレゼンテーション資料に色や動きをつけるなどして分かりやすく効果的に改善したり、花押を制作する際に資料となるくずし字辞典が全員分ないことから、参加者全員分の名前のくずし字資料を用意したりと、歴史学を専攻している学生が少なく中でも皆で意見や知恵を出し合い、会場の雰囲気づくりの細部に至るまでしっかりとコーディネートし、短い期間で「学芸員レベル1」を十分に運営してくれました。限られた時間の中でイベントを作り上げ、運営するという一つの経験となったと思います。

この五日間の実習で学芸員の仕事の一端を見て体験したことが、今後、実習生が進む道の中で一つの糧となればうれしく思います。



SHOP INFORMATION



京都のクラフトマンシップを軸にプロダクトを開発する「KIWAKOTO」の器。KIWAKOTOとは、「際殊」、古語で「格別であるさま」という意味があります。現代のライフスタイルに合わせ、誰もが手に取ることができ日常に寄り添う「生活用品としての工芸」を掲げ、京都・清水の職人らの手仕事により作られた“清水焼”の器。古くから茶の湯の流行と共に発展してきた伝統工芸品です。

清水焼は清水寺参道で参拝客の土産として、神の宿る土地の土を入れて焼かれていた焼き物が発祥とされています。当時の都であった京都に、全国から職人が集まり、貴族や皇族、文化人からのお誂えに応えるため技術が磨かれ、物事の捉え方や考え方も含め代々受け継がれてきました。そのため、清水焼には他の地域の伝統工芸品の焼き物と異なり、決まった技術や土がなく、日本中の様々な地域のルーツ、それぞれの良さが積み重なり現代の清水焼のスタイルになっています。

またKIWAKOTOの器は、日本の「家紋」から着想を得て生まれた自然の花の形がモチーフに、縁が薄く繊細な「薄づくり」も特徴の一つです。作り手のあたたかみと細部までこだわった繊細なデザインが、手に取ると伝わってきます。どんなお料理も似合い、毎日の食卓を華やかに彩ってくれます。京都の研ぎ澄まされた美意識と、代々受け継がれてきた作り手のこだわりが詰まった、京都の伝統工芸品・清水焼をぜひお手に取ってご覧ください。

営業時間 10:00 - 17:00
定休日 月曜日(祝日の場合は営業。翌火曜日が振替定休日となります)
TEL 0564-83-5952 FAX 0564-83-5953
MAIL yagura@b-soup.com
HP <https://www.facebook.com/museumshop.yagura>



YOUR TABLE

岡崎市美術館併設のカフェレストラン『YOUR TABLE』。ガラス張りの店内には太陽の光がいっぱい入り、お洒落で開放的な空間が広がります。ランチ時には景色を愉しみながらお食事をすることができます。

カフェタイムにはケーキセットや軽食などを販売中。

営業時間 11:00~21:30 土日祝 10:00~21:30
定休日 月曜日(祝日の場合は営業。翌火曜日が振替定休日となります)
LUNCH 11:00 - 14:30 (L.O.14:00) T E A 14:30 - 17:00 (L.O.16:00)
DINNER 18:00 - 21:30 (L.O.20:30)
TEL 0564-28-0141 H P <https://your-table.owst.jp>

新型コロナウイルスの感染症法上の位置づけが季節性インフルエンザと同じ5類に移行し、3年余り続いたコロナ対策が大らかな転換点を迎えた今夏、どうする家康展には連日大勢の方にお越しいただき、当館は活況を呈した。NHK大河ドラマの知名度もあるが、様々な自粛を強いられたい生活から解放されて、お出かけしたいという欲求も強くあつたことだろう。工事休館もあつたため、久しぶりに館内に響くアナウンス、来場者の声や熱気に触れて、通常に戻ってきたことを嬉しく思った。オンラインも否定はしないけれど、やはり展覧会は実際に足を運んでもらうことで成り立っている。覚えておきたいだろうか。コロナ禍当初「不要不急」の言葉の下、真っ先に挙げられた施設のひとつが美術館や博物館だったことを。人類未知のウイルスから命を守ることは最優先だが、社会にとつての不要不急が何を指すのか曖昧なままミュージアムが名指しされたことは衝撃だったし、残念で寂しくもあつた。迎えて今年4月、大幅改正となつた新博物館法では、博物館事業として地域の文化観光やまちづくりへの取り組みが努力義務となつた。博物館に観光の中心になれ、地域の活性化につなげて経済効果を高めよという。掌を返したような政府の旗振りに素直に振り回される必要はないが、ウイズコロナの下、ミュージアムの立ち位置を見直す機会でもある。どうする！どうしたい？ミュージアム。(伊)

表紙画像：〈東大寺二月堂修二会 造花(椿)〉 桑司よしおか蔵



開館時間 午前10時～午後5時
※最終の入場は閉館時間の30分前まで

休館日 月曜日(祝日に該当する場合は、その翌日以後休日でない日)
年末年始 ※展示替えのため臨時休館する事があります。

HP <https://www.city.okazaki.lg.jp/museum>

ARCADIA OKAZAKI CITY MUSEUM NEWS

【岡崎市美術館ニュース/アルカディア】 第96号 2023年10月発行
編集・発行 岡崎市美術館
〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町1番地 岡崎中央総合公園内
TEL 0564-28-5000(代表)